

紙上法話

故僧正建仁寺に御せし時

けんんにんじ おわ

この三月で六三四Mになるといいう東京スカイツリーが新名所となつています。一方では東京タワーが建設された昭和三十年代を懐かしむ昭和ノスタルジーという静かなブームがあります。私自身その頃は小学生でした。高度経済成長へと向かう前、人々の生活は貧しく不便でもあったが、そこには人と人とのふれあいが、隣近所で互いに助け合う生活がごく普通にありました。三月でセンター布教師を退任される山口県の渡辺勝人老師には折々に教えをいただきましたが、中でも昭和三十年代を東京で過ごされた頃のエピソードは師の温かい人柄と相まって心に残っています。

「昔はよかった」という類のお話しをするつもりはありません。けれども自らの命を絶つ人が十三年連続で三万人を超え、という現代社会は、やはりどこかに欠陥があるのではないでしょうか。「自殺対策に取り組む僧侶の会」(東京では悩む人たちの手紙を受け付けているそうです。「やっ」と気持ちの届け先を見つけた)「だれにも言えなかった」という手紙に、僧侶たちは三人一組で相談しながら返事を書いていたりしています。高齢化がすすみ、孤族といわれる人が増加している社会で今求められていることが、人と人との出会い、ふれあいであることは言を俟ちません。

「正法眼蔵随聞記」には道元禪師の人との出会いが多く記されていますが、その一つに栄西禪師との出会いがあります。

センター布教師 安国寺住職

森下 慈孝



「故僧正建仁寺に御せし時」

栄西禪師が建仁寺に住せられた頃、一人の貧者が来て「我が家は貧しくて、数日も食事ができない餓死しそうになっています。どうか慈悲をもってお救いください」と言った。

その時建仁寺のどこにも食物も財物もなかった。ただ薬師如来の光背の材料にする打ちのべた銅が少しあったので、栄西禪師はこれを自ら折って束ね「是れを食物に換えて餓えをしのぐがよい」と与えてしまわれた。

弟子たちはこれは仏物已用の罪にあたると訝しく思って尋ねると、禪師が答えて言われた。「まことにその通りである。しかし仏は自らの手足を分かちても衆生に施されるであろう。現に餓死しそうな人には仏像の全体与えても、仏の御心になう。自分自身はこの罪で悪道に墮ちようと衆生の餓えを救うべきである」

随聞記には栄西禪師の心の高さを、今の学道の人もよくよく考えてこの心を忘れてはならないと記されています。お二人の出会いには僅かな期間でしかありませんでしたが、その間に接した教えは新鮮で魅力的で、その出会いによって道元禪師の禅への思いが深められたことは想像に難くありません。

「黄花翠竹咲き匂ふことなくとも、人々に春光春色を感じしめる程尊き人」

栄西禪師の厳しさの中にも、温かく開放的な人柄を紹介された言葉です。